●2色刷り特集●

真言密教奥義「即身成仏」秘密修行

空海が編みだした方法を実践すれば だれもがブッダになれる!!

大宇宙の根源原理と直接交流し、悟りを開きブッダとなる!凡人にとって夢のような真言密教のこの奥義——。ところがかつて、だれもがそれを可能とするシステムかの弘法大師空海は開発していた!空海の見た宇宙原理とは?そして、ブッダの智慧とは?真言密教秘伝の行法が、いまここに明らかにされる!

文—吉田邦博
イラストレーション 杉本一文

序 超人空海が開いたブッダへの道

即身成仏を得て今も生きる空海

「即身成仏」というと、羽黒山や湯殿山に祀られている即身仏、いわゆるミイラの姿を思い浮かべる読者も多いだろう。

つまり、高僧が民衆の飢餓の救済や、強力な信仰を得るために、自ら望んで暗くて狭い穴の中に座り、長い時間をかけて食を断ち、静かに読経しながら命を絶っていくという壮絶な話である。

これがいわゆる「入定信仰」だが、本来、真言密教でいう「即身成仏」とは、こうした「自己犠牲」を意味するものではなかった。

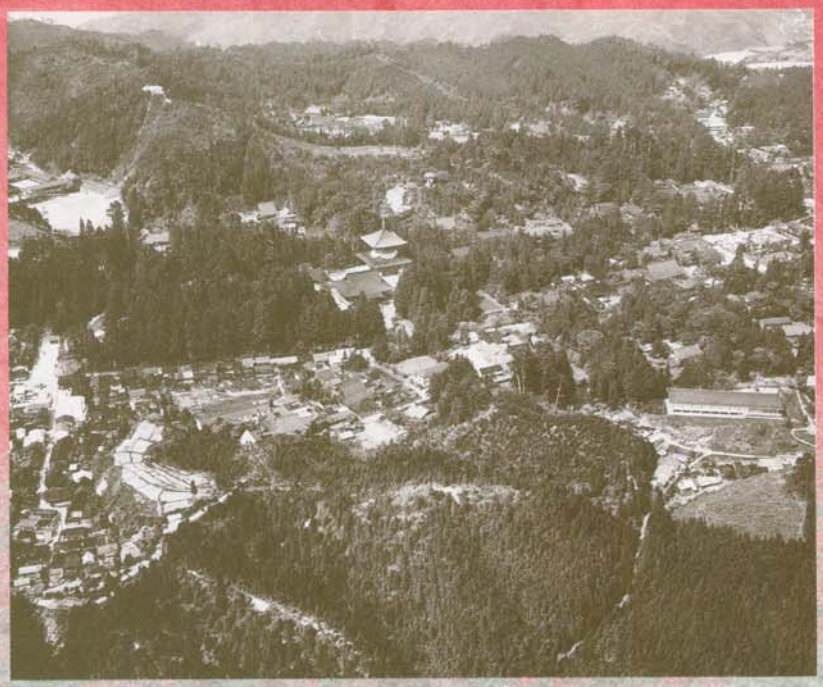
そもそも入定というのは、深い瞑想の境地を意味する言葉であり、高僧が食を断ち、ミイラになってしまうということではないのである。

にもかかわらず、なぜこうした信仰が生まれたのだろうか？

時代は西暦832年の8月にまで遡る。

この年、高野山に建設中の根本大塔の法要が終わった直後から、空海は水以外いっさいの食事を摂ることを拒否しはじめた。心配した弟子たちが何度も食事を勧めるが、空海は頑としてそれを受けつけようとしない。

断食はその後2年も続き、3年目に入るとついに水さえも拒んだ。



⬅弘法大師・空海。みずからがブッダとなったのち、人々にもそのための方法を開いた。

⬆空海によって開かれた真言宗の聖地、高野山。今日もこの山では、即身成仏を目指す僧たちが修行に励んでいる。

そんなある日、主だった弟子たちが空海のもとに集められた。

朱の椅子に結跏趺坐（禅定特有の座法）で座した空海は、不安に駆られる弟子たちを前に静かに語りはじめる。

「私は3月21日寅の刻、山に帰る。嘆くことはない。これは終わりではなく始まりなのだ。

そして遠い未来、この世に弥勒菩薩が降臨されるまで、私は高野の山内で深い禅定に入る。

そのときがいたれば、私も弥勒とともに説法の座にいるだろう。それまでよく励み、人々に尽くし、この世界を密厳浄土とするのだ。

もし私に会いたくば、南無大師遍照金剛と唱えよ。そのときはいつ何どきでも求める者のもとを訪れ、力を貸す」

そして堂の扉が閉ざされ、空海は、そのままいっ終わるともない深い禅定に入っていった。

空海はまさに「入定」したのだ。

このように、死ぬことと入定することは、まったく違う。

事実、ある弟子が49日の法要の後、入定した空海のもとを訪れたが、最後に別れたときの姿のまま瑞々しい肉体を保ち、静かに座していたという。また、わずかに開かれた半眼は師が深い禅定にあることを示していた。

ただひとつ違っていたのは、顎にうっすらと髭が伸び、髪もまた伸びていたことだったという。

空海はまさに生きながらにブッダとなったのだ。

そして、ブッダである空海は1200年近く経った今もなお、高野山奥の院で堂に籠もり、人々の平安を願って座している。

あらゆる悪事がはびこる末法の時代の終わりになって、救世主＝弥勒菩薩が現れるまで、静かに衆生救済を祈願しているというのだ。

そのため、空海のもとには、現

在でも毎日温かい食事が運ばれ、ときにはその衣も替えられる。

かくして即身成仏となった空海は、肉の身をもって、今もなお生きつづけているのである！

無数の奇跡を得た超人・空海の人生

では、これほどの謎めいた伝説を生む空海とはいったい何者なのか？　生きながらにブッダとなる即身成仏とはいったい何を意味しているのか？

空海は、一言でいうと、とてつもない天才であった。

驚くべき短期間のうちに学問を究め、あるときは芸術家であり、あるときは技術者であり、また山林修行者でもあった。

このように空海には、実にさまざまな「顔」がある。

したがって、そうした伝説をいちいちあげていくときりがないのだが、なかでももっとも知られているのが、高野山開山の際の次のようなエピソードだろう。

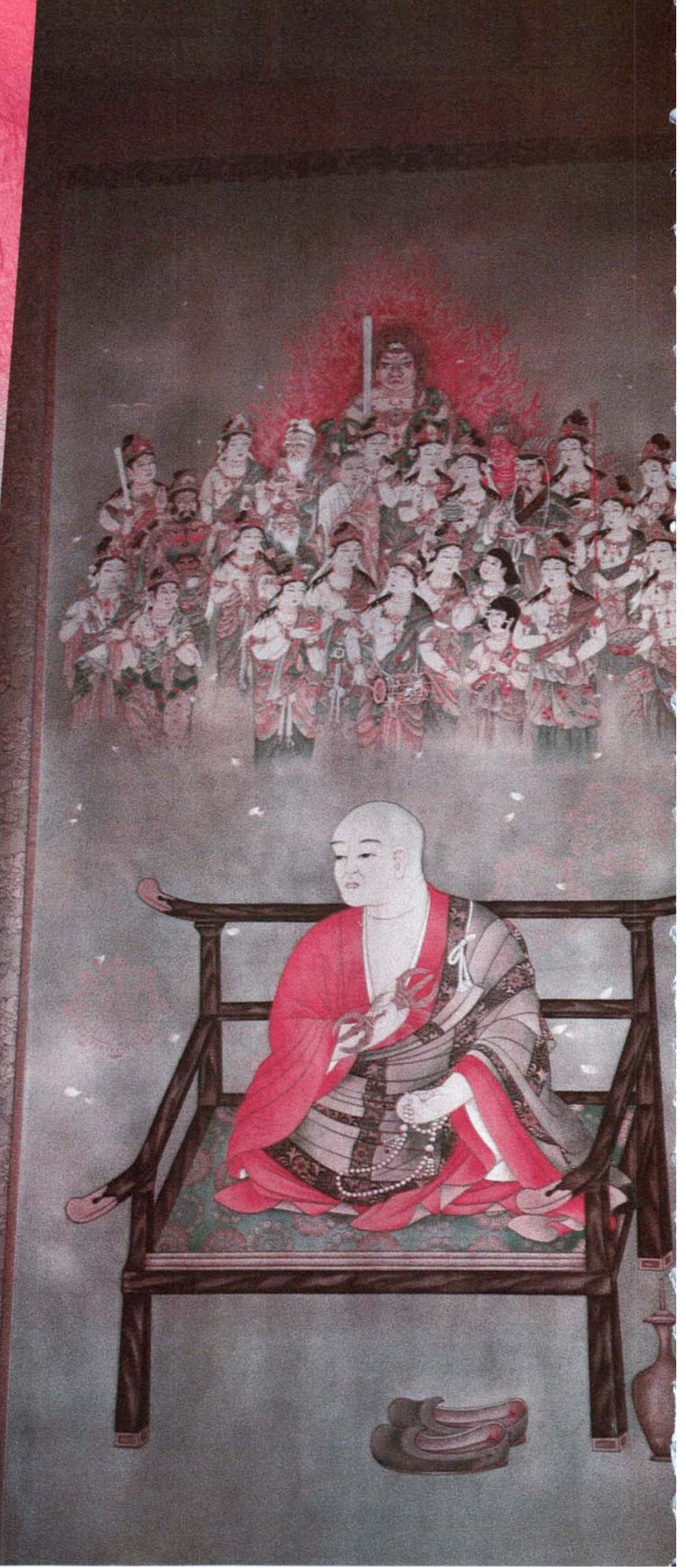
当時、道場を開くために最適な場所を捜して諸国をめぐっていた空海が、大和と紀伊の境にある真土峠にさしかかったとき、突然、ひとりの猟師が現れて案内をかってでた。

空海はその猟師に導かれ、その途上で地神の丹生津比女に許しを請うための宣託を授かりながら険しい山に分け入っていった。やがて山頂に着くと、そこには広大な聖地が広がっていた。

それこそが、現在の高野山なのである。

不思議なことに、案内してくれた猟師はそこで、いずこへともなく消え去ってしまう。実はこの猟師も、地神である狩場明神であった。

つまり空海とは、日本の地神でさえも味方するほど、すぐれた霊的指導者であり、異能の人物だったのだ。



あるいはまた、「飛行三鈷の伝説」というものがある。

唐（現在の中国）に留学して密教を学んでいた空海は、かの地からの帰路、密教の法具、金剛杵のひとつである三鈷杵（両端に三叉の刃を持つ武具をかたどったもの。ちなみに1本のものを独鈷杵、5本のものを五鈷杵と呼ぶ）を宙に投げた。

すると、それは遥か日本にまで飛び、後に道場となる高野山の中心にあった松の枝に引っかかったというものだ。

この三鈷杵は、現在も高野山に存在しているといわれ、それを白河上皇や、鳥羽上皇が一時所蔵していたときには、その法具によってあらゆる病が癒えるという奇跡を起こしたともいう。

もちろんこうした話は、あくまでも「伝説」の域を出ないものであるかもしれない。ある偉人の素晴らしさを強調するために、後世の人が神秘譚を創作することはよくある話だからだ。

では、今も空海がこの肉の身をもって生き、堂の奥で祈りつづけているという信仰もまた、こうした伝説と同様なのだろうか？

結論からいえば、「ノー」である。多少の誤解があるにしても、空海の入定信仰には、即身成仏の本質がかなり明確に隠されているし、それを裏付ける空海の業績もまた、枚挙にいとまがないほどである。

そこには、空海が生涯をかけて説いた秘義、体得した行法、即身成仏についての具体的な修行法が残されている。

少なくともこれらに関しては、決して伝説などではなく「史実」なのである。

壮絶な行の果てに手に入れた悟り

空海は、当時の大学をドロップアウトしたとき、都合3度にわたって山林や陰所に籠もり、ある修行を行っている。

その行の名は「虚空蔵求聞持聡明法」と呼ばれ、そのころの雑密（空海の密教以前の非体系的密教）の代表的な修行法だった。

「ムー」読者であれば、本誌にも再三にわたって登場しているので、耳にされたこともあると思う。

しかし、その内容はまさに壮絶をきわめる。

具体的には、100日の間、狭く暗い聖所に籠もり、一日に1万遍、最終的には100万遍の虚空蔵菩薩真言を唱えることで、最後は虚空蔵菩薩と一体となり、その結果、脳を活性化させることで爆発的に記憶力を増進させるというものだ。

空海はこの行をまず、奈良の比蘇寺で行い、2度目を徳島の太龍寺の舎心岩、そして最後に高知の室戸岬の洞穴で行ったという。

3度も行ったということから、最初の1、2度は失敗していたか、あるいは練習的意味あいがあったのかもしれない。

また、こうした修道の経緯は、後に整えられた真言密教の行法におのずと活かされることになるが、このことについては後で詳しく説明する。

いずれにせよ、一日に1万遍の真言を唱えなければならないというこの行の厳しさを、想像してみていただきたい。

行中は、人と話をするのはもちろん、食事も水もほとんど摂ることはできないし、沐浴も制限されている。

というより、真言を一日に1万遍唱えるとなれば、そんな時間がとれるはずがない。

普通の人ならば最低でも行だけで15～16時間、あるいはかなり丁寧にやった場合、20時間くらいはかかってしまうはずだ。

それを連日100日の間、最終的に100万遍唱えて、初めて満願となるのだ。

だから多くの修行者は意志が続かず、あるいは身体を壊して挫折する。それもそのはずで、下手をすれば死んでしまうほどの荒行なのである。

が、これほどの行を、空海は3度目には間違いなく貫徹し、成就している。

そのときの様子は、空海の論書である『三教指帰』に「谷は響きを借しまず、明星来影す」と明確

Books Esoterica 第19号

秘密仏教の完成者、弘法大師・空海――。
その偉大な験力は
いかにして獲得されたのか？

真言密教の本

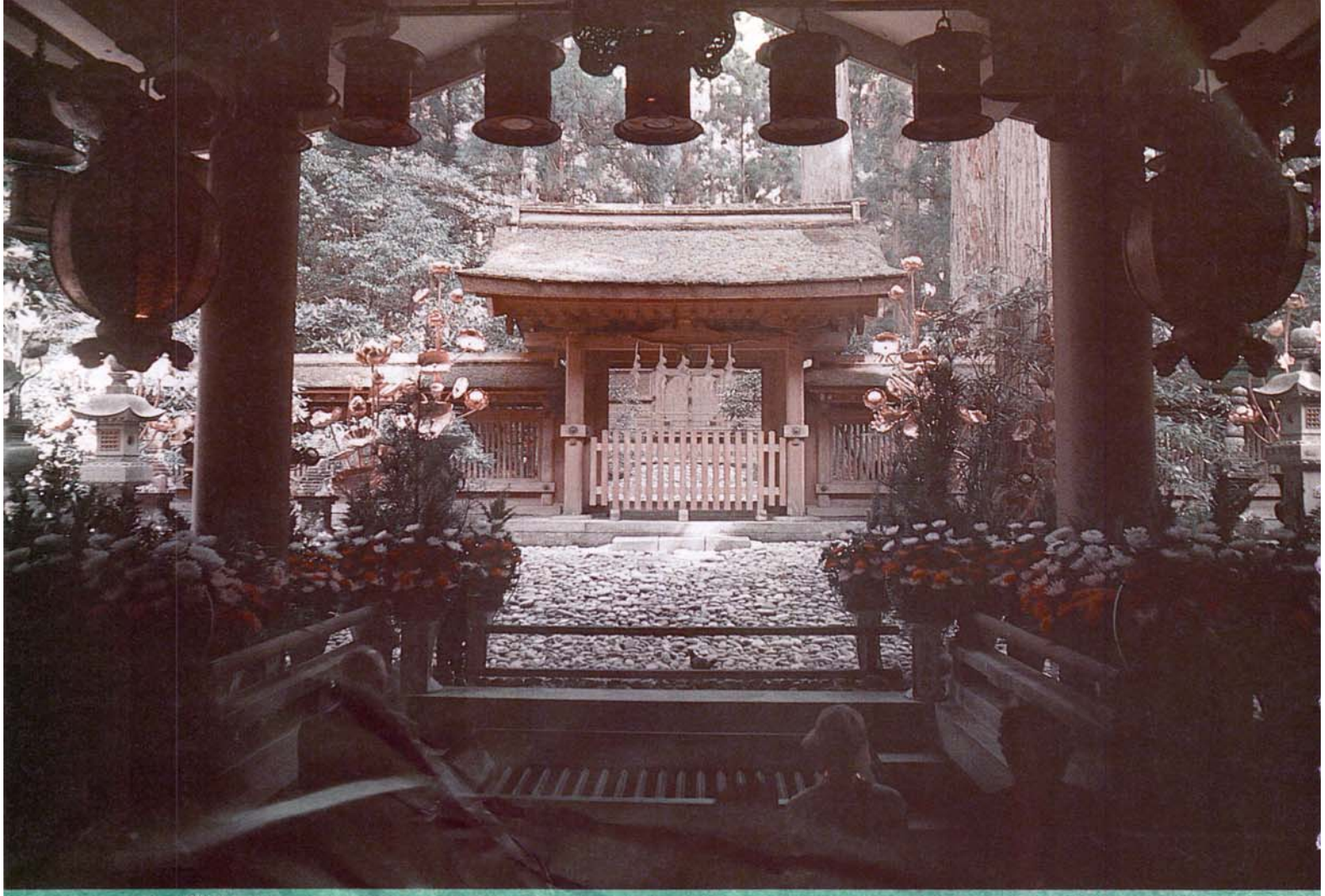
空海伝説の謎と即身成仏の秘密

真言密教の謎に焦点をあて、
その全体像と真の魅力を発見する、
注目の一冊！

最新刊
2月12日発売!!
定価1236円
（税込）

〈おもな内容〉
◆超人空海の謎
知られざる青年期、入唐時代の秘密、超人伝説と水銀鉱床の関係、密教システムの解読……ほか
◆大霊域「高野山」を歩く
◆真言宗・超人高僧列伝
◆密教魔術の世界
宿曜道、立川流、呪符、秘薬……
◆本山・宗派・名刹オールガイド
◆即身成仏実践マニュアル

学研



⬆空海が入定した高野山奥の院。ここには今も空海が座し、衆生救済の日の訪れを待っている。

に述べられている。

この表現によれば、まず修道している洞穴の周囲にある谷が響いたというのだ。

もちろん、地震が起きたということなどではない。

空海自身の身体に変化が訪れたのである。続く「明星来影す」も同じことだろう。

つまり、100万遍の真言を唱えたそのヴァイブレーションにより、それまで空海の中で眠っていた「何か」が目覚めたのだ。

事実、空海の意識は、このときから一変する。

このときの空海のように、身体の中の「何か」を目覚めさせ、虚空蔵菩薩（宇宙）と一体となることこそが、まさに即身成仏体験であることはすでに明白だろう。

事実、この行を成就したあとで入唐した空海は、現地ではほとんど何の修行をすることもなく、いきなり師僧の恵果大阿闍梨から伝法灌頂を授けられているのだ。

本来ならばこのイニシエーションは、即身成仏をとげた修道者でなければ絶対に受けることのできない密教の最奥義、最終認可である。

つまり、空海は密教の大成者であり、即身成仏をとげたとされる師の恵果から、日本での修行においてすでに自分と同じブッダとなっていたことを公式に認められたのだ！

では、この未曾有の大天才空海が到達した大宇宙との合一――凡人の想像を遙かに超えた「即身成仏」と呼ばれる境地とはいったいどのようなものなのか？

また、この謎の境地をだれもが等しく成就できるという、空海が編みだした即身成仏の修道システムとは何なのか？

この後、いよいよその具体的な方法を明らかにしていくつもりである。

なお、ページ数の関係もあり、さらに詳しい内容については、ブックス・エソテリカ『真言密教の本』をお読みいただきたい。

真言密教とその他の仏教との違い

現在は、葬式や法要を中心とした冠婚葬祭の専門職のように思われているが、仏教とは本来は道を求める者が出家し、戒律に基づくストイックな集団生活をしながら瞑想し、托鉢し、説法することで修道し、最終的に悟りを得る＝つまり成仏陀教（ブッダに成るための教え）であった。

では、ブッダになるには具体的にどうすればいいのかというと、宗派によってさまざまな方法がとられている。たとえば、浄土教系の宗派であれば、一心に「南無阿弥陀仏」を唱える念仏行をするし、日蓮宗であれば「南無妙法蓮華経」という題目を唱える。禅宗はひたすら淡々と日常をこなし、座りつづける。

そうした方法は、すべてブッダ（覚醒をとげた者という意味で、個人名ではない）という山頂を目指している点において、どれが優れているとか劣っているとかいうことはない。

ただその道がいく筋もあるということにすぎないのだ。

問題にすべきは、自分にとってどれがもっとも合った方法かということだ。

ただ、空海は、そうした顕教（理論的な教理に重点が置かれた教え）的なアプローチでは、ものすごく時間がかかってしまい、生きているうちにすべての人間が成仏することなどできないと考えた。そこで、最短の道としての密教（実践的仏教）を体系化し、確立させたのである。

壱 即身成仏を得るためのシステム

出家システムと仏道成就の道

生きながらにブッダとなる最短の道が、密教の修道法にあることはこれまで述べてきた通りだが、その修行を行うにはやはり出家しなければならない。

そのシステムがどれほど精緻に効率よく整えられているとはいっても、その複雑さ、困難さからいって、在家のまま、ごく普通に日常生活を送りながら片手間でやれるような甘い行ではないからだ。

とはいっても、だれもが気軽に出家できるはずなどないし、現代社会においてとなれば、なおのことそれは困難である。

筆者は、場合によってはやる気しだいで、在家者の修道だけでも十分即身成仏は可能だと思うし、それに類する経験もできると考えている。

それはたとえば、一定期間山に入り、各種の真言を唱え、山林を縦走する修験道であったり、多くのお遍路さんのように、ひたすら祈りを捧げ、巡礼する四国八十八か所参りのようなものだ。

これとて、根底に流れる密教の教えに大差はない。

ただ、正式に出家し、修行をする前にはどうしても経ておかなければならない一連の手続きがあるので、それを紹介しておく。

この項は、あくまでも最善の策として、あるいは知識として読んでいただきたい。

さて、最初に行わなければならないのは、生涯自分を手取り足取り導いてくれる修道の師を見つけることだ。

この時点で、修道の成就の9割は決まってしまうといっても過言ではないだろう。

何といっても、師が即身成仏をとげていなければ話にならない。

目的地を知らないガイドに、そこまで案内してもらえるはずがないのだ。

そして、これが重要なことだが、もしまともに機能していれば、密教の修道というものには、ほぼ例外なく急激な身体的変容がつきまとう。

そのとき師は、弟子を正しい方向に軌道修正するだけの強大な知識とパワーをもっていなければならないのだ。

ゴータマ・ブッダは500人の弟子を成仏に導いたことが仏典に記されている。それだけブッダにパワーがあったことの証明である。

修行開始までの長い準備期間

密教の修道者は、ゴータマではなく空海を師とし、その介在者としての師僧を得る。

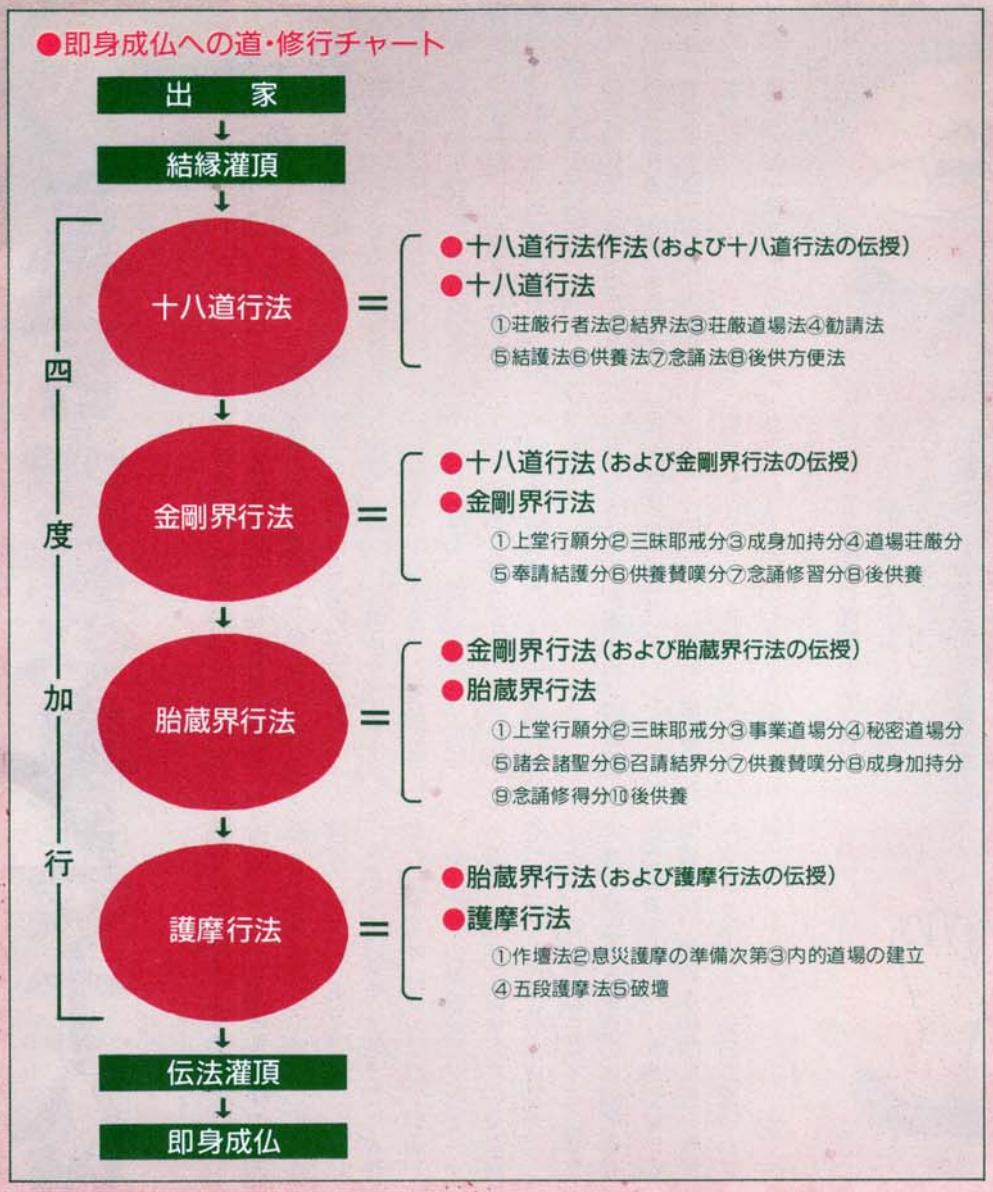
師僧を得た修道者は、師に従い出家得度する。

その後、ほどなくして「誓願」と「受戒」という儀礼を受ける。

誓願とは、仏教の修道に入って成就する目標を定め、仏に宣誓することをいう。

いわゆる「不退転の決意」の表明で、周囲にやる気を示して修道から逃げだせないように自分を鼓

↑在家の信者と仏を強い縁で結ぶために行われる結縁灌頂。（写真＝永坂嘉光）



舞し、縛るのだ。

一方、受戒とは、やってはならないことや、やらなければならないことを聞くことである。もちろんその後、修道者である限り、その禁を破ることはできない。

「灌頂」というのは、師僧が弟子のそれまで行った行を評価し、次のさらに高いステップに上がることを許可する、一種の関所のようなもので、この手続きを経ずに上に上がることはできない。

その最初にあるのが、「結縁灌頂」と呼ばれる儀礼で、修道者はこのとき目隠しをされ、導き手の僧によって暗く長い回廊を敷曼荼羅という平板な立体曼荼羅まで導かれる。

受者の結んだ指には樒の小枝が挟まれ、それが合図によって曼荼羅上に放たれる。

このとき樒が落ちた場所の諸尊が、その修道者に縁のある守護仏となり、その後の修道を見守るのである。この儀礼を「投華得仏」と呼ぶ。

さらに灌頂儀礼には、「四度加行」（後述）を終えた段階で受ける許可灌頂である「伝法灌頂」や、「学修灌頂」、各学習を終えた段階で、次の修法を得るために受ける「受明灌頂」など数種が存在する。

また、出家後、すぐに修行に入れるわけでもない。最低でも1年間の見習い期間を経て、師僧からそろそろ本格的な密教の修行を行わせてもよいと判断されると、ようやくその日時を尋ねることが許されるのだ。

ずいぶん厳しいと思われるかもしれないが、そのくらいしないと俗人としての垢が落ちない、浄化されないと考えられているためである。また、実際に行に入れば、それ以上に厳しい日々が待ち受けているわけだから、それも当然というべきだろう。

ただし、あくまでもこれはひとつの目安であり、人によってはそれほどの期間を必要としないということもあるだろうし、逆に数年の見習い期間が必要とされることもあるだろう。

ようするにこれは、すべては自分がついた師僧の判断しだいなのである。

さて、こうして弟子が期日を尋ねに師僧のもとを訪れ、そのときすでに本格的な修道に入るだけの機根（時機と能力）がその弟子に備わっていると師僧が判断すると、師は密教の占星術である『宿曜経』を典拠とする宿曜占星術を駆使して、修行開始にもっとも適当な吉日をはじきだし、おもむろに弟子にいい渡す。

こうしていよいよ本格的な修道「四度加行」が始まるのだ。

弐 真言密教奥義十八道行法

秘法・四度加行と十八道行法作法

出家という準備段階が終わると、修道に入るが、ここでもいきなり本行に入るわけにはいかない。

その前に日常の服装や生活規定を学び、実際にごく初歩的な修法を行う。あわせて数種の簡単な印言（両手の指を組み合わせ諸尊を表現し、その真言を唱えることで最終的には諸尊と一体となる、密教修道の基本。図参照）などの基礎知識を学ぶ。

この比較的短い修法を昼夜2回から3回、一定期間行い、本行の予行演習とする。昔は各自が完全に覚えるまで行われたらしいが、現在では20日くらいで終了する。

次に、こうした所作をマスターしたかどうかの小テストを経てその認可となる「受明灌頂」、「四度加行」の第1階梯である「十八道行法」を伝授され、この段階は終了する。

さてここで、「四度加行」の全体像を概観しておきたい。

この「四度加行」とは、真言密教における行法の名称である。ただし、空海がこの行で即身成仏したというわけではない。

そもそも空海が修道したときには、まだ現在のようなシステムは確立していなかった。

空海は、その類い希なる能力があったからこそ、雑密の修道法であった求聞持法と出会い、その目的を成就できたのである。

しかし、それはあくまでも空海だから可能となったのであって、万人に有効なものではなかった。

そこで、空海はもっと効率のよい、だれもが実行可能なシステム化された修行法を求めた。そして、師である恵果の協力のもと、もっとも効率的、普遍的な即身成仏法として創案されたのが、この「四度加行」なのである。

さて、「四度加行」は4つの大きなカリキュラムに分かれている。

第1はその準備段階である「十八道行法」、第2は金剛界の曼荼羅をベースにした世界観を観想することで、疑似的な生仏不二（衆生である修道者と宇宙の本質である仏との神秘的合一。即身成仏）の体験をし、続く本格的な合一を果たす第3階梯のための準備行とする。

そして3番目の階梯として、四度加行の実質的な帰結点でもある「胎蔵界行法」を行う。

このときにベースとなる世界観は、いうまでもなく胎蔵界曼荼羅の世界である。

4番目に位置する最後の階梯は「護摩行法」で、修道者は護摩を焚くことによって神仏との合一を果たし、あわせて真言密教に欠かせない修法の方法をマスターすることになる。

これらの行法は、ひとつひとつを単独で行っても、あるいはそれらの中にある「阿字観」や「月輪観」などの一部の観想行を取りだしても、密教の修道とすることはできる。しかし、やはり一定の定められた期間、集中的に順を追って修道していくことが、最上最短の即身成仏への方法となることは間違いない。

真言宗では、こうした行法は専

六

金剛橛

七

金剛墻

十一

請車輅

十二

召請

十三

馬頭明王

十四

金剛網

十五

金剛炎（火院）

十六

閼伽

十七

蓮華座

十八

五供養*

＊五供養には5つの契印がある。ここではそのうちのひとつをあげている。

十八契印ガイド

一 浄三業

二 仏部三昧耶

三 蓮華部三昧耶

四 金剛部三昧耶

五 被甲護身

八 道場観

九 大虚空蔵

十 宝車輅

修学院や尼僧学院、あるいは、セミプロがあらためて自らを鍛えるために入る真別所などで行うか、各師僧の寺で独自に行うかの方法を選択する。

いずれにしても、四度加行を終了して、伝法灌頂を受けないうちは、一人前の密教僧として扱われないのである。

行法の根幹をなす 真言十八道行法

では、最初の階梯である「十八道行法」とはどのような内容なのだろうか?

ごく大まかにいってしまうと、第2階梯である金剛界行法や、続く胎蔵界行法で行われる本格的な瞑想法を行うための予行演習的な意味あいがあり、同時に真言密教僧としてマスターしておかなければならない、基本の印言を徹底的に学ぶ。

また、これまで習俗の垢にまみれ、汚れきった心身を浄化して、神仏と一体となることによって即身成仏を成就させるためにふさわしい器を作ることにも重点が置かれている。

詳しい次第(作法、儀礼の順番)については『真言密教の本』であらためて確認してほしい(以下の行法も同じ)が、以下にその流れを一通り紹介しておこう。

この行法は別表にあるように大きく6つのブロックに分かれる。

これを六法といい、それぞれに2〜数種の印言が定められていて、そのメインの印言をとくに「十八契印」と呼んで重視する。

つまり、これらの印言が、密教のすべての修法の基本となり、この行をマスターしない限り、いかなる修道にも入ることができないというわけだ。

①荘厳行者法(護身法)

ここで行う所作は5種の印言によって構成され、この後のすべての行法の前に必ず行われる。

これは、神社でお参りする前に手や口をすすぐ禊ぎの役割をする。

②結界法

修道者は一所に籠もりあらゆる観想をするわけだが、このときに魔に邪魔されるようなことがあってはうまくいくはずがない。

そのために強力なパワーをもつ護法尊に頼んで、修道の場所にバリアーを張り、整える。

③荘厳道場法

今度は修道者の心の中に、簡単な住居を観想によって建てる。

④勧請法

ある程度恥ずかしくないような道場ができれば、今度はそこにいよいよお客様を招き入れる。

客とは神仏諸尊のことだ。

この段階では、仏画にあるような紋切り型の姿しか想い浮かばないだろうが、とりあえず形だけでも一心にこれを繰り返すのだ。

すると、ある日ふと気づくと、その仏のひとりひとりが生身をもち、語りかけてくるようになるはずだ。

その後、⑤結護法によって道場のガードを固め、⑥供養法によって神仏をもてなす。

これまでが、十八契印と呼ばれる基礎的にして、絶対に必要な観想で、この後の本格的な行法の基礎修練となる。

十八道行法は、これらの基礎準備の後、初歩的な合一の観想を行い、終了する。

六法	十八道(十八契印)
❶荘厳行者法(護身法) 修道者の身・口・意を加持し清浄にする	①浄三業 ②仏部三昧耶 ③蓮華部三昧耶 ④金剛部三昧耶 ⑤被甲護身
❷結界法 障魔の及ばない清浄な空間を作る	⑥金剛橛 ⑦金剛墻
❸荘厳道場法 諸仏を迎える道場の設営	⑧道場観 ⑨大虚空蔵
❹勧請法 本尊を迎える	⑩宝車輅 ⑪請車輅 ⑫召請
❺結護法 道場の内外を強固にする	⑬馬頭明王 ⑭金剛網 ⑮金剛炎
❻供養法 本尊供養	⑯閼伽 ⑰蓮華座 ⑱五供養

参 神仏の世界を構築する金剛界行法

イメージの中で聖なる宮殿を構築

ここから修道者は、いよいよ本格的な修行に入る。

まず初めに行うのは、最初の瞑想法である金剛界行法である。

真言密教は、世界の構造をふたつの違った方向からとらえる。

金剛界曼荼羅と胎蔵界曼荼羅がそれだ。

曼荼羅とはある種の世界地図で、その視点が違うことから、一見するとまったく違った印象を受けるが、いずれも同じ大宇宙、人間と神仏との関係を表している。

そこには時間や空間から、宇宙の果てや始まり、ブラックホールから生や死の世界、神仏から修羅まで、この大宇宙に存在するすべての要素が描かれている。

修道者はこれらの曼荼羅の世界観を把握することで、広大な宇宙の構造を知り、自らがその本体である大日如来の一部であり、本質は一体であることを学ぶのだ。

そのために用意されているのが、「金剛界行法」「胎蔵界行法」というふたつの瞑想法である。

この行法は『金剛頂経』という密教の根本経典をもとにしている。

全体の次第は8つの段階に分かれているが、その根幹となるのは3番目の「成身加持分」という金剛界曼荼羅の観想行と、続く「道場荘厳分」という観想だ。

これらふたつの瞑想法によって、修道者は心のうちに神仏の住まう世界を具体的に作り上げる。

その手順はロールプレイング・ゲームのような要領で、その外観を遠くから眺めることから始まる。

この世界で修道者は、野を越え山を越えて、須弥山のあるところまでたどり着く。

須弥山とは、古代インドで考えられていた聖山で、山頂には帝釈天が住まう宮殿がある。

ただし四度加行では、ここの主人が大日如来になっている。

須弥山はまた、同時に巨大な五輪の塔とも見なされている。

五輪の塔とは、この宇宙を構成する5つの要素（五大説）――地・水・火・風・空を便宜的に重ねることで、宇宙そのものを象徴した宇宙観だが、ここまでいろいろな要素が複合されてくると、さすがにどのような形をしているのか、うまくとらえることなどできなくなってしまう。

おそらく、この行法が創案された当初はもっと単純な世界図だったものが、しだいにいろいろな要素が取り入れられ、今日のように複雑化してしまったのだろう。

それはさておき、修道者はさらに道をたどり、今度は門から宮殿の中に入っていく。

はじめそこに神仏はいない。

まず修道者の頭の中で、床から柱、壁や天井にいたるまでを順々に組み立て、飾りつける観想をしていくことで、神仏の住居である宮殿を建設していくのだ。

こうして住まいが完成すると、いよいよ神仏を招き入れる準備を始めるのだが、その際、かなり興味深い観想がある。

それは「大虚空蔵」観と呼ばれるもので、これにより修道者は観想することで、まったく何もない虚空から神仏をもてなすための供物を取りだしていくのだ。

ところで、こうした発想はどこからくるのだろうか？

仏教には「空観」という独創的な考え方がある。それは、ブッダの悟りの中心的なものだが、一言でいってしまえば、物質的な形あるものには、壊れることのない絶対の実在などない。この世のすべての物質は因（原因）と縁のめぐり合わせで成り立っている、とする考え方だ。

観想したことはすべて現実になる

たとえば陶器のコップがあるとしよう。このコップは、ある山にあった粘土を原料としている。

あるときその粘土を持ちだし、コップにしようと考えた人間がいた。すると、その人間とコップを作るという行為が「因」である。そしてたまたまコップになる粘土を手に入れたことが「縁」だ。

この因と縁（縁起説という）の理論に、前述したこの宇宙の物質的要素はすべて地・水・火・風・空の5つの組み合わせで成立しているとする五大説を取り入れ、なおかつその理論が事実だとするという立場をとったことで、この大虚空蔵観は成立している。

このことは何を意味しているのかというと、物質が因縁によって成立している虚しいものであるのなら、逆に何もない、ただ5つの原子レベルの要素だけが散漫に存在する空間から、修道者が頭で想い描くだけで、どんなものも物質化できるということになる。

これは絵空事ではない。

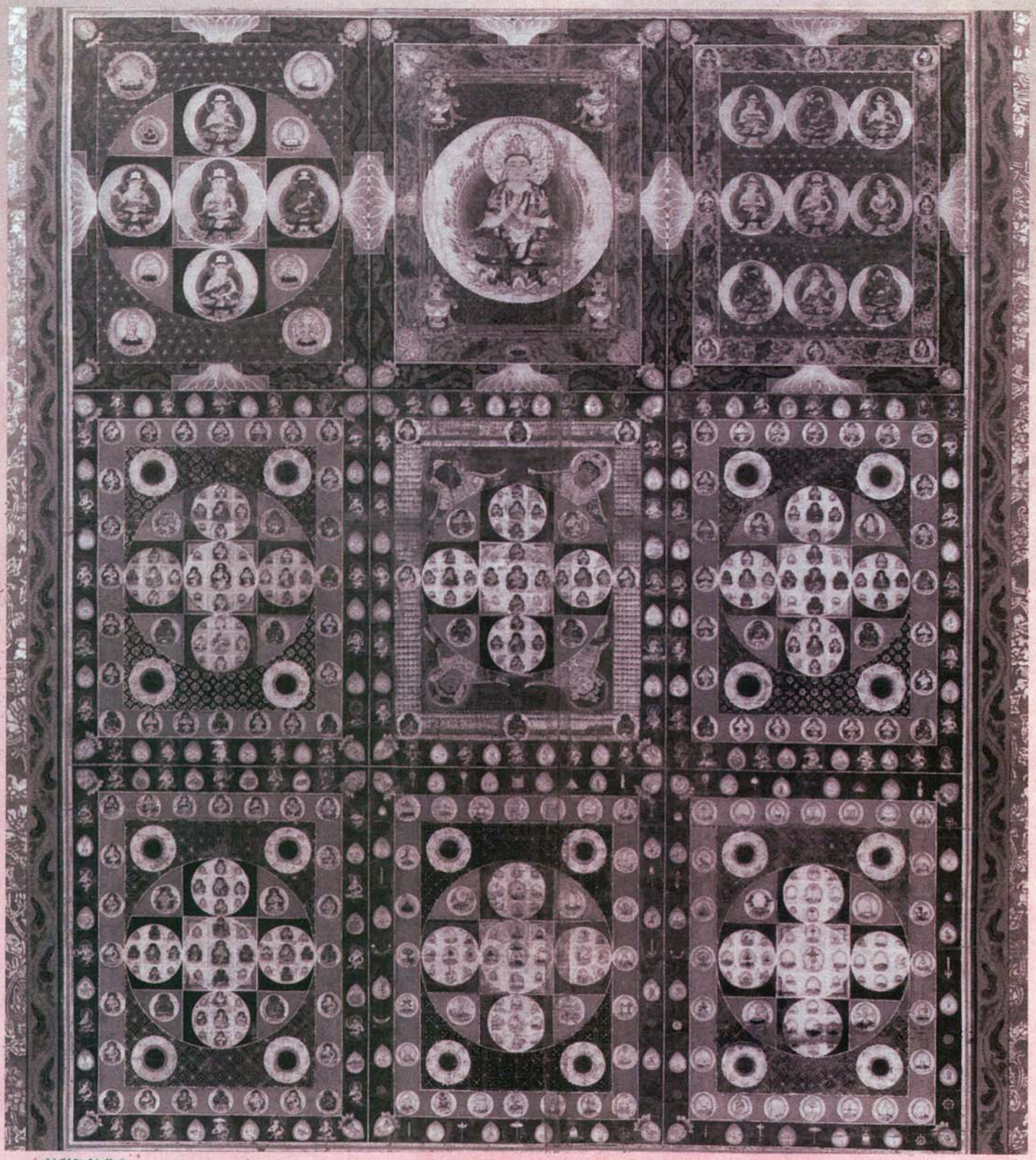
たとえば、チベット密教の真理を究めた行者が、法具を虚空から取りだしたという話がある。

また、原始仏典には、遥か離れた山に雨ざらしになっていた弟子の前世の髑髏を、説法中に取り寄せたブッダの話が記されている。

つまり、空観という真理を体得した修道者は、この宇宙に遍在する5つの要素を自在に組み合わせることで、自由に物質化できることをこの観想は示しているのだ。

金剛界行法は、こうした一連の曼荼羅の観想をすることで、最終的に修道者も金剛界曼荼羅の構成者の一員であることを実感することに重点がおかれている。

それ以上の複雑な観想はまだここでは要求されない。ただ、頭で思い描くだけで、いったいどれほどのリアリティをもてるのか？



⬆金剛界曼荼羅。「金剛」とは、「悟りの智慧がかたく壊れないこと」を意味する。そしてこの図像は、智慧を体現する大日如来を中心とした諸尊の集まりでもある。いうまでもなくこれは、この大宇宙を表現しているものであり、同時に智慧の象徴でもあるわけだ。（東京国立博物館蔵）

という疑問はあるかもしれない。

しかし、四度加行には過酷な日程、時間規定が設定されている。

金剛界行法でも、一座を貫徹するのに平均して7～8時間はかかる。それを一日に3座、長期にわたって行わなければならないのだ。

しかも香を炷きこめた暗く狭い場所で一心に座り、観想しつづけるのだから、酸欠状態にもなるだろうし、睡眠時間も限定されているから頭も朦朧としているだろう。

つまり、この行を真面目に行えば、通常の肉体的感覚は破綻し、雑念やとらわれが沸き起こる余地などはなくなってしまうのだ。

そんな日常とはかけ離れた特殊な環境があってこそ、はじめてこれらの観想は成立する。

だからこそ修道者は、神仏との出会いが可能となるのである。

四 神仏の意識へといたる胎蔵界行法

胎蔵界行法は、『大日経』という密教のもうひとつの中心経典をもとにした観想行である。これこそが四度加行のメインの行といい切ってもいいだろう。

その次第は10段階に分けられているが、中心となるのは金剛界行法と同じように諸仏諸尊との一体観である。

行法のもととなる世界観は、いうまでもなく胎蔵界曼荼羅だ。

その構造は、観念的な世界観の金剛界曼荼羅と比べるとかなり具体的で、神仏と諸尊諸菩薩、諸魔などの上下関係が、比較的わかりやすくなっている。

簡単にいってしまうと、中心に位置するのが、大宇宙の本源である大日如来。それを中心にして、それぞれの諸尊が住まう8つの蓮葉（中台八葉院）が描かれ、その周辺には11のブロックが幾重にも取り巻いている。

この曼荼羅全体には409尊が描かれ、それらはすべて等しく大日如来の身の現れであるとする。

つまり、本源である大日如来が、さまざまな姿に形を変え、あらゆる求めに対応できるように変化、存在していることをこの曼荼羅は示しているのだ。

さて、修道者は順次以下のような観想を行っていく。

まず大日如来と一体となった後、順を追って下位の諸仏と同化し、最後は外枠のブロック（最外院）に住まう諸尊とも合一する。

救済すべき人間というのは、100人いれば100の特徴、100の悩み、とらわれを抱えているものだ。修道者はそのひとりひとりの立場になり、その気持ちを知らなければならない。

このように、ここでは前行法と異なり、諸尊のディテール、個々のキャラクターを一尊一尊詳しく観想していくことで、その行動傾向、考え方を学ぶ。

つまり修道者が、肉体という枠をもちながら、同時に神仏そのものと比肩するだけの意識状態を実現させるのだ。

空海はこれこそを「即身成仏」と表現する。つまり、この段階で即身成仏が完成するのだ。

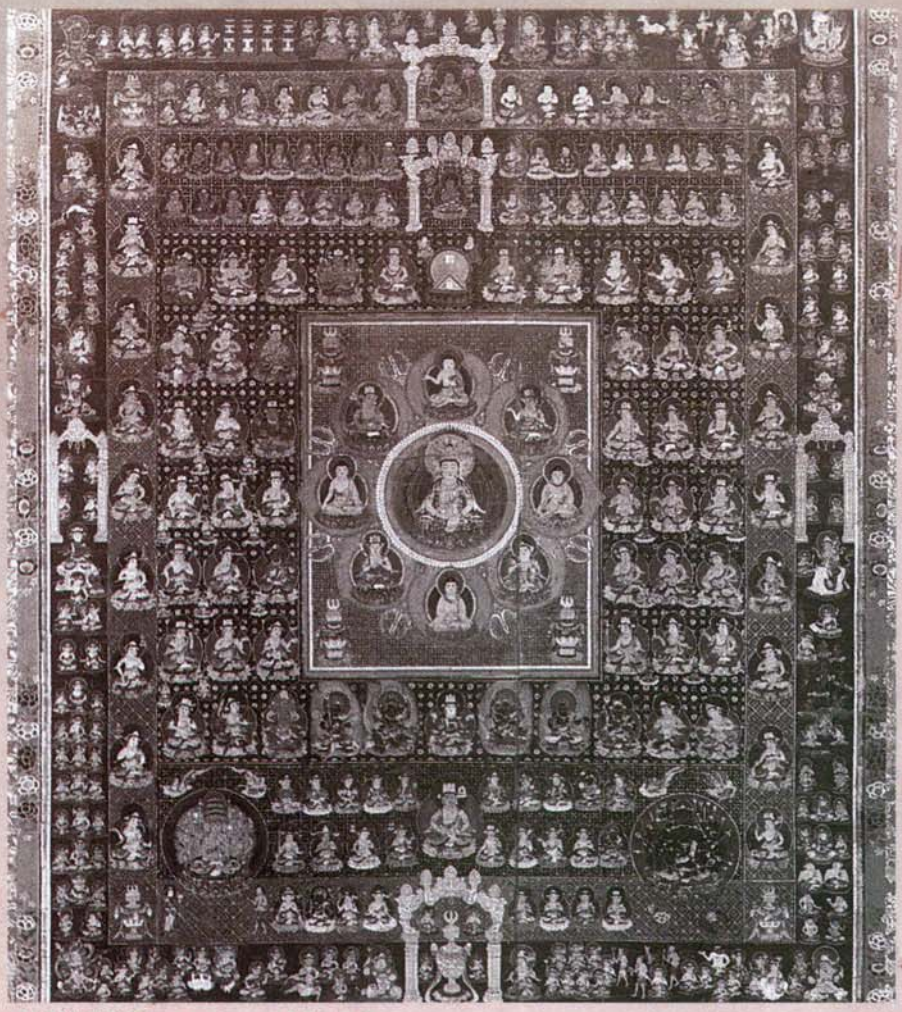
同時にこの行法では、即身成仏をとげた後に修道者が目指すべき菩薩行も示されている。

修道者がある種の特殊な環境のもとで観想を行っていることはすでに述べたが、そのとき、彼らの眼前には具体的にどのような変化が訪れるのだろうか？

疲労して現世的なとらわれを離れた特殊な環境、真言などの要素が複合されたとき、修道者の眼前には、生身を持った諸仏が現れるという行がある。古代インドの修行法、成就法（サーダナ）と呼ばれる観想行がそれだ。

何日も一所に籠もり、香を炷き、最低限の食事を摂りながら、いつ果てるともなく真言を唱えつづける過酷な修行を続けたある日、彼の眼前には生身をもった女神が現れるという。そして修行者は女神を観、触れ、その香りを嗅ぐ。

この汎世界的に共通の宗教体験が、四度加行においても求められていることは、容易に想像できるだろう。



↑胎蔵界曼荼羅。「胎蔵」とは「母胎」を意味する。つまり、仏の真実が、あたかも母親の胎内に蔵され、やがてときを経て出産するような世界像なのである。（東京国立博物館蔵）

伍 炎による観想行——護摩行法

護摩といえば、新年や節分などの年中行事や、時代劇などに登場する怪しげな呪術を連想するかもしれないが、本来はそうした現世利益的なものではない。衆生と神仏とが一体であるとする生仏不二の境地を目的としたものだ。

つまり、これまでの3つの行があくまでも観想を媒体として行われた合一体験であったのに対し、今度は炎という道具を用いて合一を図るのである。

その起源は遠く古代ペルシア、ゾロアスター教の密儀に端を発している。ところが原始仏典には、ブッダが拝火教（ゾロアスター教の亜流）を偶像崇拝とし、否定する記述があるから、護摩も本来の仏教とは相いれない発想であったことは間違いない。

だが、密教はあえてこれを取り入れ、合一思想にまで昇華させたのである。

前置きが長くなってしまったが、護摩行法は、幾重にも交差させた護摩壇を設け、本尊を前に供養し、真言を唱えながら火中に護摩木などを投入することで火炎を立ちのぼらせ、その炎によって本尊と一体となり、その真意を知る。

つまり、炎による観想行ということができるだろう。

具体的な次第は以下のようになっているが、基本作法はこれまでの観想行と共通のものだ。

まず作壇がある。

この段階で地神に許しを請い、護法を召喚して結界を引き、いわゆる霊的な磁場を完成させる。

こうしたやり方は、これまでの観想行の道場建立の方法とも大差はない。あくまでも頭の中で観想するものだからだ。

次に具体的な準備をする。

法具を整え、本尊に捧げる水や供物を整えるのだ。

もちろん修道者も、心身の準備をしなければならない。

やがて心内に本尊を迎え、一体となるにふさわしい道場の建立を行う。

これまですでに数十日、多い場合は数百日にもわたって繰り返してきた観想行である。比較的障害なく構築されることだろう。

この道場の整備が終わった段階で、いよいよ眼前に築いた護摩壇に火を投じる。

このときに召喚されるのが火天であり、この作法のことをとくに五段護摩法と呼ぶ。

種々の真言はもちろん、月輪観やウン字、ラン字、バン字などの諸尊を象徴する梵字（種字）を順次火中に観想していく。

この観想の特徴は、真言密教が採用している唯識の分析法をかなり細かく行っていくことによって、修道者が徹底して自己確認をすることだろう。

唯識とは、人間の心を9つの層（九識）に分類し、その働きを解明することで己自身を深く知り、さらに転じて神仏の思考方法を学びとろうとする学問で、西洋の心理学に似ている。

護摩行法とは、一見かなり派手で、それゆえさまざまな誤解を受ける面もあるが、現実にはその表面に見えるパフォーマンス的意味あいを遙かに超えた、深遠な観想行なのである。

↑高野山の真言密教僧によって焚かれた護摩。これは、炎による観想行である。

六

行法の最終儀式
――伝法灌頂と学修灌頂

これまでの4つの行法は、現在ではだれもが等しく100日前後で終了することになっている。

が、数十年前までは、人によってその所要日数はまちまちだったし、場合によっては師僧の判断で打ち切られ、あらためて行う好機を探るということもあった。

それほどまでに過酷な行を終えたからこそ、終了に当たっては師僧が弟子に敬意を表し、神仏と同等の境涯に達したことを認可する仕上げの儀礼が重要になる。

それが、伝法灌頂というものだ。

この灌頂に関する詳細な儀礼や次第は実際に授けられた者でなければわからないし、その内容を漏らすことも厳しく禁じられている。

だが、わずかながらその概要は伝えられている。

式次第は、冒頭で紹介した結縁灌頂に準じるが、もっとも違う部分は、これを受ける修道者は、これまでの修道によって即身成仏をとげ、師僧からは一人前の真言僧、つまり神仏と同等の智慧（仏菩提、これについては後に解説する）を得た存在として、尊崇の対象として扱われることだ。

そのことを明確にしているのが、曼荼羅をかたどった内陣の中央に設けられた蓮葉の台座の上に弟子を座らせ、師僧が弟子に向かって神仏に接すると同じように恭しく頭を下げ、供養することだろう。

やがて、台座から下りた弟子は、師僧によって大日の5つの智慧を表す5色の瓶に入れられた智慧の水を頭頂に灌がれる。

この儀礼によって、ようやくブッダと認められるという意味で、この灌頂のことを別名、「阿闍梨灌頂」とも呼ぶ。阿闍梨とは、密教における最高の僧位で、その語源は「行うべきことを知る人」という意味のサンスクリット語の「アーチャーリヤ」からきている。

この「行うべきこと」の中に、即身成仏のさらに先にある菩薩行が含まれていることは明らかだ。

伝法灌頂は、真言密教の僧籍を得た者ならとりあえずはだれもが授けられる灌頂儀礼だが、その先にも最高位の灌頂がある。

それが学修灌頂だ。

高野山に限れば、それはほぼ15年に一度、ごくわずかな選ばれた阿闍梨を対象に4日間の長きにわたって、秘密裏に執り行われる。

当然その儀礼は明かされることはないが、ただひとつだけ明らかなことがある。それは灌頂を修道者に授ける阿闍梨が、弘法大師空海その人であるという点だ。

もちろん、実際に最奥の印言や、細々とした所作を授ける直接の伝燈大阿闍梨は存在するが、その仕上げとなるパワーの伝授は、修道者が直接、弘法大師の御真影に触れることで完了する。この御真影は空海が存命中に自身で開眼供養した、まさに彼の分身なのだ。

修道者はこのとき、空海より以心伝心で灌頂を受けることから、この灌頂は別名以心灌頂とも呼ばれている。文字通り、この学修灌頂こそが、真言密教の最終最奥の灌頂といえるだろう。

終

現世に仏を体現する即身成仏

真言密教の修道法を一通りみてきたが、これらの行法に共通するのは、実に効率のよい浄化システムを持っているということだ。

では、何を浄化するのか？

それは、われわれ人間というものが生まれた当初から存在する魂の表面に、幾重にも蓄えつづけてきた罪や穢れ、もろもろの悪想念による真っ黒なススだ。

人の魂は輪廻転生を繰り返す。真っ白だった雪の塊が、転がるうちに泥がつき、真っ黒になっていくように、人の魂の表面にも罪や穢れが染みついてしまう。

「四度加行」ではまず、いろいろな浄化作業である意識の修練を繰り返すことで、汚れてしまった魂を、生まれたときと同じような真っ白な状態に戻す。

そうなると、具体的にどのような現象が起きてくるのだろうか？

一言でいってしまうと「感じやすく」なる。それが次の段階だ。

この段階で、これまではなかなか感じることのできなかったものを感じ取り、ごく小さなことにも感動できるようになる。

普段、われわれがもっている感性に対して、これを「超感性」と表現しよう。この超感性こそ、仏教でいう仏菩提（ブッダの智慧）のことなのだ。

人は何かのはずみに、自然（大宇宙）との一体感を切実に感じることがある。

それは、道端の何の変哲もない無名の草木に光る露の輝きを見ることで、生命というものの持つ素晴らしさ、尊さに心を揺さぶられるような感概を覚えることだったり、台風一過の秋の夕日に照らしだされた絶妙な光彩を放つ雲と空の美しさに全身全霊を奪われ、普段とは違った感覚を体験するといったことだ。

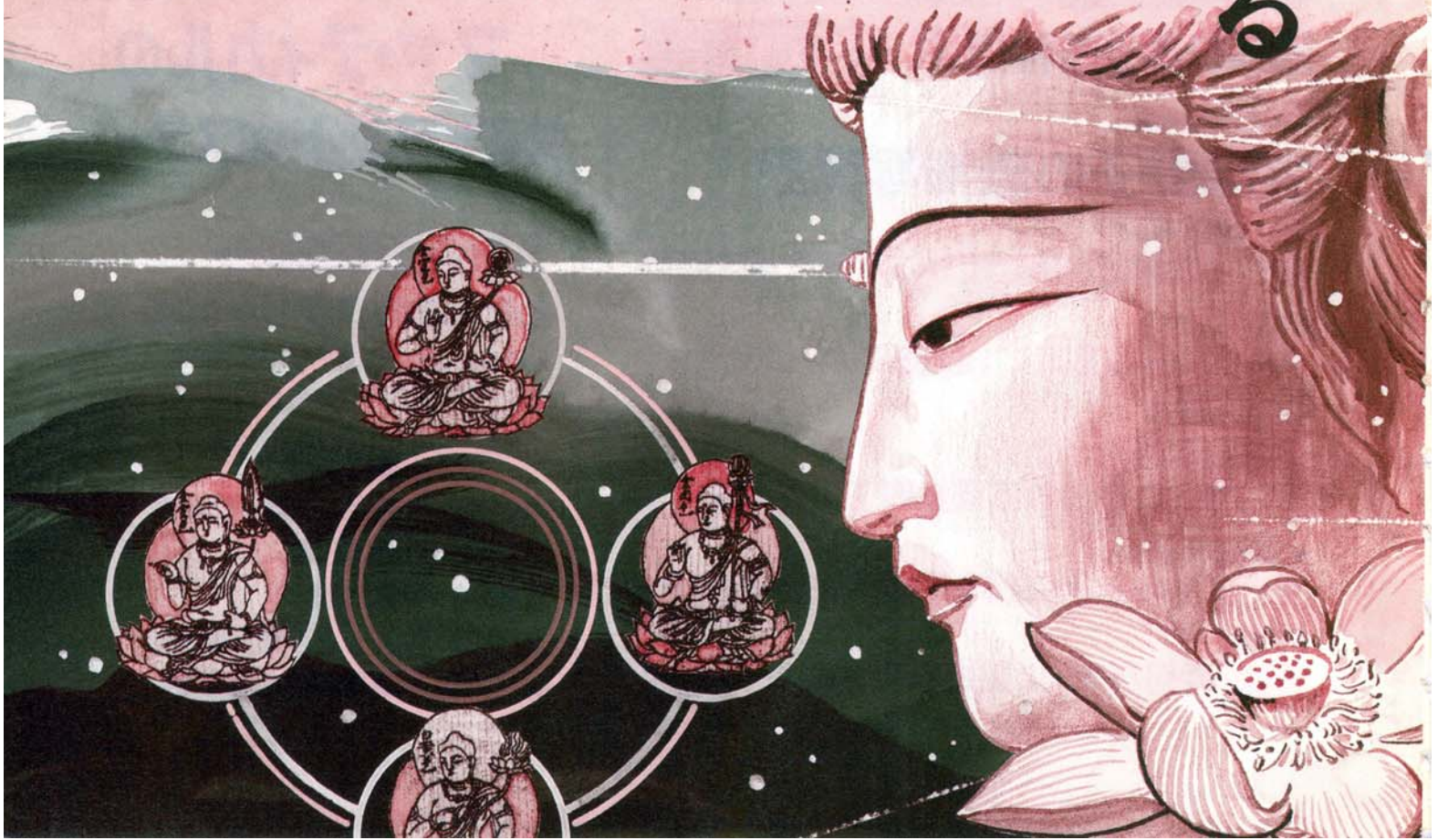
だが、ごく稀にそうした一体感、えもいわれぬ恍惚感にとどまらず、それをさらに深めた感覚を感じ取る感性が発現することがある。

ただ、美しいものを美しいとするだけで終わらず、今こうして生かされていることへの感謝であるとか、生まれてきたことの意味に代表される諸々の命題を瞬時にして悟るのが超感性である。

この超感性の永続的獲得こそが、仏を体現すること、すなわち空海の提唱した即身成仏なのである。

だが、多くの場合その感覚は一瞬、一刹那（75分の1秒）の点として消失してしまい、日常生活に持ち帰ることは難しい。

しかし、超感性は、日常生活に持ち帰ってこそ意味がある。

つまり、何かの瞬間に仏（大宇宙）の一端にふれることができても、それをいつでも必要なときに手にとって感じ、生かすことができなければ、実質的には何の意味も価値もない。

空海がその超感性を獲得した後に生涯をかけて行ったのは、民衆の救済や、国家の安泰を祈ることだった。即身成仏をいかに日常に生かすことができるか？　それこそが修道者に求められる終わりのない課題なのだ。